

# 映画による態度変容についての研究 (1)

石 川 桂 司

## 1. 問題の設定

小・中学校における「道徳」の指導の場合、教師の一方的な教え込みや単なる徳目の解説に終ることなく、映画やテレビなどの視聴覚材料を利用して、具体的に、かつ、生活に密着して指導するように強調されている<sup>1)</sup>。

このような「道徳」の指導の場合や、あるいは、婦人学級などの社会教育の場で視聴覚教材を利用する場合、重要な点は、映画などの視聴覚教材が、単に知識の伝達の役割を果たすということだけではなく、態度や行動の変化・形成に役立つという点である。

Dale, E. (1) も指摘しているように、映画は、われわれの態度に影響を及ぼし、これを変化させると一般に考えられているが、従来までの映画の効果に関する研究をみると、知識の習得に関する実験研究は数多く見受けられるけれども、態度や行動の変容に関する映画の効果研究は比較的少ない (2, p. 64)。

知識の習得については、映画を見る前と見たあとで知識量がどのくらい増したかをペーパーテストで簡単に測定できることから、映画による知識習得に関する実験研究は多い。また、映画を見たあと数週間後、数ヶ月後にその知識量がどう変化したかという問題や、あるいは、その映画を見せる場合の instruction の与え方によって効果がどうちがうかということなど、いろいろな点について、かなり細かい分析研究が行われている。

ところが、映画による態度変容についての研究は、態度そのものの考え方やその測定の方法など、研究上、根本的なむずかしさがあり、知識の伝達に関する映画の効果研究よりも遅れていることはいなめない事実である。

そこで、この研究では、まず最初に、Hovland, C. I. (3) や Maletzke, G. (4) が行ったこれまでの研究を参照しながら、とくに 1950 年の Kishler, J. P. (5) の研究や、1960 年ごろから Audio-Visual Communication Review にのせられた Attitude Film に関する論文を参考にしつつ、態度変容過程に及ぼす映画の影響について、そのメカニズムを追求したい。

そして、これによって、小・中学校の指導や社会教育の場で映画を利用する場合の効果的な指導方法を明らかにしたいと考える。

映画の態度変容に及ぼす影響についての研究のうちで、とくに本稿でとりあげたのは、この問題に関するこれまでの研究の概観と、第一次調査の結果である。

## 2. これまでの研究

映画による態度変容に関する初期の研究としては、1930 年代に行われた Thurstone, L. L. と Peterson, R. C. (6) の研究がある。

Thurstone らは、イリノイ州のふたつの町で、中国に好意的な映画 “Son of the Gods” と、中国に批判的な映画 “Welcome Danger” を、9 年生から 12 年生の子どもたちに見せたところ、前者は、子どもらの中国に対する態度を好意的なものに強め、後者は、わずかではあるが、子どもらの態度を非好意的なものに変化させたことを認めた。すなわち、Thurstone は、彼の考え出した等現間隔法 equal appearing-interval method と呼ばれる態度測定尺度を用

1) 文部省：小学校学習指導要領，大蔵省印刷局，昭 33. p. 245

いて、映画が単に知識の伝達のはたらきだけでなく、観衆の態度を変化させるはたらきのあることを明らかにしたのである。

その後の研究としては、映画による態度変化の度合が時間の経過とともに増加していく、いわゆる Sleeper effect を明らかにした Hovland らの研究や、映画の意図に反した方向への態度変化を示す boomerang effect を分析した Cooper らの研究などがある。

1950年には、Pennsylvania 州立大学の Kishler が、劇映画“Keys of the Kingdom” (Gregory Peck 主演) を使用して、大学生 814 人の宗教的寛容度について調査した。この映画は、中国における布教活動に一生を捧げたカソリック牧師の生活を描いたものである。この研究では、学生をカソリック教徒と非カソリック教徒のふたつのグループに分け、夫々を、さらに、キリスト教教師に「高い信望 high prestige をいだいているグループ」と「低い信望 low prestige をいだいているグループ」に分け、この映画を見て宗教的寛容に関する態度がどのように変化するかを調べている。

その結果、統計的な有意差は認められなかったけれども、カソリック教徒群と high prestige group が、夫々、非カソリック教徒群と low prestige group に比べて、映画による態度変容が強く見られた。

すなわち、このことは、観衆の中でも、映画の主役に強い「同一視」を感じている人や高い尊敬の念をいだいている人は、その映画によって、宗教に関して既にもっている態度 established attitude が「強化」reinforcement されることを表わしている。

このほか、戦意高揚の態度形成のために映画が役立ったという Miles, J. R. と Spain, C. R. の研究や、映画による動機づけと態度変化の問題を取扱った Miller (2) の研究などがある。

これらの研究は、いずれも、映画によって観衆の態度が変化していくことを示しているが、その変化は、既にもっている態度を強化するという変化であり、映画は、この態度の「強化」に効果があることを示している (7)。

ところが、昭和 33 年 10 月から 3 ケ年間にわたって、岩手県教育委員会や現場教師と共同で行った「へき地教育における視聴覚的方法の有効性」の研究 (8) の中では、従来までの研究結果とは別な映画による態度変容が認められた。

この研究は、岩手県二戸郡一戸町面岸(おもぎし)小・中学校と面岸部落を対象として、主として映画とスライドを利用して行われた研究であり、学校教育と社会教育の両面から行われた研究であるが、社会教育の面では、村づくりの意識形成過程の中で視聴覚教材がどのようなはたらきをするかという観点から行われた。

この部落は、県道から 6km 入った全くの孤立部落で、研究開始前は、婦人会や青年学級のような組織も殆どなく、生活は貧困と無知そのものであり、家族の人間関係は、「女とベコ(牛)は、働けば働くほどよい」と言われるほど男尊女卑の考え方が強く、封建的な家族関係が常識とされる部落であった。いわゆる、おくれた、とり残された部落であったが、このことをあらわしている次のような例がある。

この部落の属していた旧姉帯村の役場で、村内の各部落に、蚊や蠅などの駆虫剤を無料で配布し、散布器具も貸出して、各部落でこの薬剤を自主的に散布するように呼びかけた。ところが、この仕事をひき受ける部落の組織がないということと、各家庭の中を他人に見せたくないという理由から、この薬の無料配布を断った唯一の部落がこの面岸部落であった。つまり、村当局の言葉によると、「打つべき手はすべて打ってしまったが、どうにもならなくてあきらめてしまった部落」であったのである。

このような部落に対して、毎月 2 回づつ大衆映画会を開き、社会教育映画やスライドを見せ

ることからこの研究は始められた。そして、この映画会で、新しい民主的な家族関係のあり方を示した社会教育映画や衛生に関する映画を見せた結果、2ヶ月・3ヶ月とたつうちに、「嫁と姑との関係」や「生活に使う水」についての部落の人々の考え方や態度が、従来までもっていたものと別のものに大きく変化していくことが認められた。しかも、その変化は、今までもっていた態度を、全く別の方向に変化することを示していた。

たとえば、この部落の人々は、それまでの「わき水」による生活に対して、「この面岸部落の水ほどいい水はないんだ」と、むしろ誇らしげに自慢していたのであるが、映画「生活と水」その他の視聴覚教材は、次第に疑問を感じさせ、更には、不満の態度をとり、これを改良してこうという行動にまで発展させたのである<sup>2)</sup>。

また、研究が始まる前には、婦人会も婦人学級もなく、PTAの集まりも男の仕事で、女性は家庭から社会に出ることなく、たゞ働いていればよいというのがこの部落の常識であった。したがって、この部落では、料理講習会などの婦人の集まりを期待することは全くできず、事実、それまで、婦人達の集る行事は一度も持たれたことがなかった。ところが、この大衆映画会を始めて3ヶ月後に、この社会教育計画の最初のものとして、婦人を対象とする受胎調節の講習会を開いた。その結果、予想に反して、たくさん婦人の参加を見たのである。長年この学校に勤務する学校長も、部落はじまって以来のできごとだと驚いていた。このような3ヶ月間の変化をもたらしたものは、大衆映画会で使用された「母親学級騒動記(東映)」や「腰のまがる話(日本映画社)」などの劇化された社会教育映画である。

それでは、このような変化は、映画のもつどのようなはたらきによってもたらされたものであろうか。

そこに、映画のもつ「間接的な説得力」ともいうべき力を想定してみることができる。たとえば、「母親学級騒動記」の中には、面岸部落の生活と同じような農村の家庭生活が描かれている。その映画にでてくる嫁と姑の関係は、この面岸部落の日常生活そのまゝである。この部落の〇〇ばあさんは、映画の中の姑と同じように嫁いびりをする。しかも、映画は、喜劇風な事件のはこびの中で、おばあさんのまちがっていることを示し、嫁と姑の望ましい家族関係のあり方を示唆してくれる。この映画をみているときの〇〇ばあさんの心理的メカニズムを考えてみよう。まず、この映画の内容が、ごく身近なありふれた事件であること、しかも、その表現が、文字やことばとちがって非常にリアルであり具体的であることから、映画の人物との「同一視」が行われる。だから、笑ったり憤慨したりしながら見ている。つまり、映画の中の生活に入り込んで見ているのである。映画の中のおばあさんの立場になっているのである<sup>3)</sup>。

しかし、反面、それはあくまでも、スクリーンにプロジェクトされた世界である。そこには、「同一視」の現象と同時に、あくまでも、プロジェクト(投影)されたものを見るという(客観視)もはたらいている。だから、映画のおかしさ、おもしろさに笑いながらも、自分と同じような意地悪ばあさんがする嫁いびりを、きまり悪そうに苦笑いしながら見ているのである。つまり、「思いあたるふし」があるのである。

映画は、決して、「これからの嫁と姑はこうあるべきです」と直接に説得しているのではない。画面に講師がでてきて講義をするわけでもないし、ナレーターが訴えているわけでもない。スクリーンには、この部落の生活と同じ日常の生活が描かれているだけである。しかし、それをみている〇〇ばあさんの気持の中には、苦笑いの中に自己反省があり、恥ずかしさがあ

2) 研究開始3年後には、簡易水道をひく家庭もあらわれた。

3) このことについて、Ball, J. 編集の Visual Communication (14) で指摘されている「代理的報酬(vicarious reward)」という考え方が参考になると思われるが、これについての研究は、あまり進んでいないと言われる。

り、また、きまり悪さがあるのである。否、自己反省とかきまり悪さとか自覚したり分析したりできない気持なのかも知れない。映画の中に没入しているうちに、自分の生活を無意識的に「フツ」と思い起し、わが身をふりかえてみる、そういう気持なのかも知れない。

いずれにしろ、この〇〇ばあさんの嫁に対する態度は、次の日から徐々に変わるのである。嫁たちは、「あの映画をみて以来、集りにも出かけやすくなった」といって集ってくるのである。

このように、面岸研究にあらわれた映画による態度の変容は、それまでの Kishler などの研究に見られるようなものとは異っていた。その変容は、単に、既にもっている態度の「強化」という現象ではなくて、それまでもっていた態度が別の方向に「転換」したことを意味しているのである。

けれども、その大衆映画会では、誰も、「姑はかく態度を変えるべきである」と直接話しかけたわけではない。たゞ、おばあさんたちも嫁も夫も、みんないっしょに映画を見ただけである。そこにはたらく力は、ちょうど、バスケットボールがバックボードにぶつかってゴールするように、映画製作者の意図が、スクリーンに屈折して観衆に語りかける「間接的説得力」とでも言うべきものであろう。それは、間接的であるだけに、すなおに観衆の心の中にしみ込んでゆき、感情に訴える。

このように、「身近な内容」の「リアルな表現」から「同一視」の現象が生じ、しかも、スクリーンにプロジェクトされた素材のつくり出す「客観視」の現象がはたらく。このふたつの現象がからみ合って、そこにひとつの自然な説得力が生れる。これが、態度を変化させる力となるのではないだろうか。

ところが、この現象を考える上で、1962年に、California 大学の Merrill 教授が発表した“Attitude Films and Attitude Change”という論文(9)が、多くの示唆を与えてくれる。

彼は、181人の海軍予備兵を対象に、文通安全教育に information film と attitude film を利用して、態度変容に及ぼす効果を比較している。

この研究に用いられた Attitude film は、28分のトーキー・カラー映画で、“The Case of Officer Hallibrand”という劇化された映画である。この映画は、ハイウエーを自動車で飛ばしてとくい先をまわって歩くひとりのセールスマンを描いているが、彼の旅行とともに、酔っぱらい運転や子どもが死んでいる交通事故現場など、たくさんの悲惨な交通事故を見せながら、観衆に不安と恐怖を与え、最後に、そのセールスマンも猛スピードで衝突して死んでしまうというショッキングな描きかたをしている。つまり、たくさんの悲惨な交通事故現場を次々に見せ、スピードでうなる車の音や、ヒッチハイカーの危険なようすや、運転しているセールスマンの軽率なスピード自慢をおり込みながら、不安と恐怖による緊張感を観衆に与え、これによって、安全運転の態度を形成しようというねらいで作られてある。

いっぽう、information film の方は、車についての知識をはじめ、運転上の注意事項や技術の解説、さらに、いろいろな交通法規などを教授する目的で作られた3本の information film をつなぎ合わせて、合計28分のトーキー・カラー映画にまとめたものである。

この2種類の映画をふたつのグループに見せて、映画を見た直後と10週間後に調査した結果から、Merrill は、次の点を明らかにした。

第1に、劇的構成の形式をとった attitude film は、態度の構成要素のうちの情緒的要素 affective component に直接はたらきかけるのではなくて、まず最初に、認知的要素 cognitive component にはたらきかけるという点である。

第2は、強い不安や恐怖を起させるような筋はこびや描写は、交通安全についての態度をスムーズにつくりあげるといよりは、むしろ、それを妨げる防衛的回避 defensive avoidance

をつくりあげるといふ点である。

すなわち、この研究で使用された attitude film は、製作者のねらいとしている運転者自身のマナーの形成というよりは、むしろ、交通規制を強めたり、道路標識をもっとたくさんつくるようにという、交通条件に関する強い期待を観衆の心の中に形成するという逆効果のあることを示している。そして、この研究では、むしろ、information film の方が、運転者の態度をスムーズにつくりあげるのがに役立ったという結果がでている。

このような研究結果は、交通安全教育に関する映画について言えることであって、教室で利用される教育映画にそのままあてはめることはできないと Merrill も指摘している。しかし、この研究で、態度を情緒的側面と認知的側面のふたつの面からとらえて、これらに対して、映画がどのように影響し、態度変容にどう結びつくかを論じている点は興味深い(10, 11)。

すなわち、このことと面岸研究でみられた態度変容の問題とを結びつけて考えてみるならば、次のようになる。嫁と姑の問題で、観衆が画面の主演と自分を「同一視」して見る情緒的側面を基礎としながらも、同時に、画面に展開される事実を客観的に冷静に見るという認知的側面へのはたらきかけが、態度変容の大きな要因になっているのではないかという考え方である。この場合、自己との「同一視」を情緒的(affective)側面と考え、「客観視」の要素を認知的(cognitive)側面と、そのまま結びつけてよいかどうか問題は残るとしても、Carlson(12)の研究でも明らかのように、態度変容において、認知的構造の変化が重要な意味をもつことは事実であろう。

そこで、この「映画による態度変容についての研究」の第一次報告では、面岸研究でみられたような複雑な態度変容の実態を明らかにする第一段階の研究として、映画による態度変容の過程を、態度構造の情緒的側面と認知的側面とから考察してみたいと思う<sup>4)</sup>。

### 3. 研究のねらい

第1のねらいは、映画によって「教職に対する態度」を変容できるかどうか、更に、その変容は持続するか否かを明らかにする。

第2に、もし変容できるとすれば、Merrill が明らかにした事実が、「教職に対する態度」の変容にもあてはまるかどうかを、次の仮説を検証することによって明らかにしたい。

仮説 I: 劇的な構成で、情緒的な面に訴えるようにつくられた映画「先生行かないで」(便宜上、affective film と呼ぶ)よりも、ドキュメンタリーな構成で、認知的な面に訴えるようにつくられた映画「教室の子どもたち」「谷間の学校」(便宜上、cognitive film と呼ぶ)の方が、「教職に対する態度」をより強く変化させるのではないか<sup>5)</sup>。

仮説 II: 映画の各場面(シーケンス)の中でも、認知的なものに訴えるシーケンスの方が、情緒的なものに訴えるシーケンスよりも、態度変容により強く影響するのではないか。

### 4. 態度測定尺度と調査票

#### 1) 教職に対する態度測定尺度

態度変容を問題にする場合、最も重要な点は、その態度を測定し得る尺度があるか否かということである。この研究では、Thurstone の等間隔法を用いて徳島大学の岸田元美氏が作製

4) 態度変容と学習の関係については、Maletzke も指摘しているように、「ひろく機能的に相互に依存」しており、information の学習と態度の認知的構造の変化との関連、そして、さらに態度変容がどう関係するかなど、複雑な問題であるが、本研究では、つぎのようなねらいを設定して考察した。

5) Merrill は、attitude film, information film と呼んでいるが、本調査で用いた映画は、affective film, cognitive film と呼ぶ方が妥当と思われた。

した「教職に対する態度測定尺度」(13)を使用した。

## 2) シークェンス調査票

映画の中のどのシークェンス(場面)が態度変容に影響するかということ进行分析するためには、プログラム・アナライザーを用いることが適当である。しかし、この研究では、アナライザーの使用が不可能であったため、やむをえず、2種類の映画について、それぞれ、20のシークェンスを列挙して、映画を見せたあとに、「教職に対する自分の考えを変えるのに関係のあったと思われる項目に○をつけよ」というインストラクションを与え、質問紙によって調査した。

## 5. 調査対象

盛岡市内K服装学院1年生(18才~19才)

A組 47名

B組 54名

A・B両組とも、高校を卒業して入学した1年生で、A・Bのクラス分けは、入学試験の成績によって、ほぼ同質になるように分けられてある。

## 6. 使用した映画

### 1) 情緒的な面に訴えるようにつくられた映画(affective filmとして)

「先生行かないで」東映教育映画部作品 白黒 トーキョー 上映時間 50分

若い教師夫妻が、へき地の学校に赴任してから、へき地教育のいろいろな苦勞を克服して、児童生徒や部落の人たちに親しまれ、やがて、「先生行かないで」という声に惜しまれながら転任していくまでを描いたもの。急病人を助けたり、部落のいろいろな相談にのったり、更に、奥さん先生が病気でたおれるようすなど、教師夫妻の尊い生活が劇化された構成で描かれている。

### 2) 認知的な面に訴えるようにつくられた映画(cognitive filmとして)

「教室の子どもたち」岩波映画作品 白黒 トーキョー 上映時間 29分

東京のある下町の小学校の2年生の教室風景を、記録風に忠実に描き、学習指導や家庭訪問をする教師の姿をおって、子どもの実態と教師の仕事についての理解を与えることをねらいとして作られた作品。女教師がナレーターをつとめており、「学習指導への導」という副題がついている。

「谷間の学校」日映科学映画作品 白黒 トーキョー 上映時間 23分

児童数14名という小さな谷間の学校で、教師の献身的な努力によって教育が改善されてゆき、その努力が村を動かして、新しい校舎が建てられ子どもたちが高められていく姿が、ナレーターの解説でドキュメンタリーに描かれている<sup>6)</sup>。

## 7. 調査手続

昭和41年2月18日:「教職に対する態度測定尺度」(No. 1)を、A・B両組に実施

昭和41年2月25日:

A組には「教室の子どもたち」「谷間の学校」(cognitive film)を見せ、B組には「先生行かないで」(affective film)を見せたあと、「教職に対する態度測定尺度」(No. 2)と、シークェンス調査票を実施

昭和41年4月23日:「教職に対する態度測定尺度」(No. 3)を実施

3回にわたって用いた態度測定尺度 No. 1, No. 2, No. 3は、岸田氏の「教職に対する態度

6) 認知的な面に訴えるようにつくられた作品として、とくに、2本の映画を見せた理由は、A・B両組に、ほぼ、同じ時間の映画を与えるためである。

測定尺度」の項目を乱数表を用いて、random に組み変えて作ったものである<sup>7)</sup>。

### 8. 調査結果とその考察

1) 映画を見せる1週間前の調査 (Pre-test) と、映画を見せた直後の調査 (Post-test), 更に、2ヶ月後に実施した調査 (After 2 mth. test) の平均態度値を比較したものが表1である。更に、これらの3回にわたる調査結果について、A・B両組の比較を行ったものが表2である。差の検定は、いずれも、t-test で行った。

表 1

Group	A			B		
Type of Film	Cognitive Film			Affective Film		
Test	Pre-T.	Post-T.	After 2 mth.-T.	Pre-T.	Post-T.	After 2 mth.-T.
Mean	2.5491	2.8447	2.4416	2.8049	2.9337	2.7369
Difference between each T.	0.2956		0.4031	0.1288		0.1968
t-value	3.32		4.17	2.67		2.53
Significance	<0.01		<0.001	<0.01		<0.05
Difference bet. Pre-T.~Aft.2-T.	0.1075			0.0680		
t-value	1.13			1.54		
Significance	N.S.D.			N.S.D.		

表 2

	Pre-T. Mean	Post-T. Mean	After 2 mth.-T. Mean
A	2.5491	2.8447	2.4416
B	2.8049	2.9337	2.7369
Difference bet. A-B	0.2558	0.0890	0.2953
t-value	4.73	1.10	2.99
Significance	<0.001	N.S.D.	<0.01

これらの表から、次のことが考察される。

- A・B両組とも、映画を見たことによって、「教職に対する態度」が変化した。A組の場合、平均値で0.2956の増加、B組で0.1288の増加があり、いずれも1% levelの危険率で有意な差を示している。
- その変化の度合は、B組 (affective film group) よりも、A組 (cognitive film group) に強くみられた。すなわち、表2からもわかるように、前調査では、A・B両組の平均値は、示すようになった。このことから、それぞれの映画で態度の変容がもたらされたが、その度合0.1%の危険率の有意差をもってB組が高かったが、直後調査では、ほぼ同じ程度の態度値を

7) 資料「教職に対する態度測定尺度」(No. 1) 参照。

示すようになった。このことから、それぞれの映画で態度の変容がもたらされたが、その度合は、仮説Iのように、cognitive film の場合に強かったと言える。

c) ところが、これらの変化は、2ヶ月後調査では、すっかりもとにもどっている。すなわち、表1からわかるように、直後調査と比較してA組で0.4031, B組で0.1968の減少を示し、それぞれ、0.1%・5%の危険率で有意な差を示している。そして、前調査の結果よりむしろ低い態度値を示している。

d) この2ヶ月後調査にみられる減少の度合も、B組 (affective film group) よりも、A組 (cognitive film group) の方が強い。表2からわかるように、直後調査では有意差を示さなかったA・B両組の態度値が、減少した2ヶ月後調査結果では、再び1%の危険率でもって有意差を示している。

つまり、これら2種類の映画は、いずれも、「教職に対する態度」に変化をもたらしたものであるが、その変化は、2ヶ月後にはもとにもどっていること、そして、その変化の度合は、増加・減少いずれの場合も、cognitive film group の方に強く認められたのである。

2) 今までに述べた態度変化について、さらに、態度測定尺度の各項目別選択率の変化から細かく比較したのが、表3と表4である。表4は、20項目について選択率をあげて、率の高い順に①から⑤までの番号を付してあるが、表3は、この中から、とくに、3回の調査結果の選択率の間に有意差を示した9項目について、差の度合を示したものである。

表3 3回のテスト結果(選択率)の間に有意差の生じた項目(%)

Group	A					B				
	Pre-T.		Post-T.		After 2-T.	Pre-T.		Post-T.		After 2-T.
1. 教職は崇高な天職	9		17	> *	0	2		4		3
2. 愛と奉仕の具体的実現	36	< ***	83	> ***	42	46	< ***	89	> ***	46
8. 常に若々しくする	13		11		19	13	< *	30		31
9. 少しの専門的知識	66		53		68	78	> *	59		69
10. 他の知的職業と同じ	55	> **	26		45	44	> *	22		33
11. 特別の職業ではない	81	> *	60	< **	87	70		56		69
12. 生活の資を得る手段	79	> *	55	< *	81	67		54	< *	79
13. 社会の隅に忘れられがち	21		30		26	9		20	> *	5
15. 世間知らずになる	2		4		0	4		0	< *	8

\*\*\* 0.1%  
\*\* 1%  
\* 5% } の危険率で有意差あり

これらの表から、次のことがらが考察される。

a) まず第1に、直後調査と2ヶ月後調査にあらわれた変化は、「教職は愛と奉仕を具体的に実現するものである」という項目の選択率の変化に関係していることがわかる。すなわち、表3に示されてあるように、3回にわたる調査結果のこの項目の選択率は、A組の場合、36%→83%→42%、B組の場合、46%→89%→46%と大巾な増減を示し、 $\chi^2$ -testの結果では、いずれも0.1% levelの危険率でもって有意な差を示している。

表 4

	項 目	A 組			B 組		
		Pre-T.	Post-T.	After 2 mth.-T.	Pre-T.	Post-T.	After 2 mth.-T.
1	教職は崇高な天職である	9	17	0	2	4	3
2	教職は尊厳な公職である	32	43	35	⑤ 48	43	41
3	教職は愛と奉仕を具体的に実現するものである	36	① 83	42	46	① 89	⑤ 46
4	教職は高尚な知性人がするものである	2	2	0	4	2	3
5	教職は次の社会を位置づける	③ 66	② 70	④ 52	① 80	② 76	① 79
6	教職は精神的満足感を与える	13	23	10	26	31	18
7	教職は明朗で愉快なものである	0	0	0	6	7	8
8	教職は其れに従事する人を常に若々しくする	13	11	19	13	30	31
9	教職は少しの専門的知識を要する	③ 66	⑤ 53	③ 68	② 78	③ 59	③ 69
10	教職は他の知的職業と同じ種類のものである	⑥ 55	26	⑤ 45	44	22	33
11	教職といっても特別な職業ではない	① 81	③ 60	① 87	③ 70	④ 56	③ 69
12	教職も生活の資を得る為の手段である	② 79	④ 55	② 81	④ 67	⑤ 54	① 79
13	教職は社会の隅に忘れられ勝ちなものである	21	30	26	9	20	5
14	教職は筋肉労働より少しましな位のものである	9	4	16	0	4	5
15	職職に従事すると世間知らずになる	2	4	0	4	0	8
16	教職に従事すると若さが失われる	13	15	13	2	2	3
17	教職はちぢ臭い職業である	4	0	3	2	0	0
18	教職は要するに守にすぎない	0	4	3	0	0	0
19	教職は子供や父兄にへつらうものである	0	0	0	0	0	0
20	教職は能無しがするものである	0	0	0	0	2	0

このことから言えることは、cognitive film group の場合でも affective film group の場合でも、その映画に描かれている教師の生活や指導をとおして、教師の子どもにそそぐ愛情を読み取り、このことが、教職に対する態度変化に大きく影響しているのではないかという点である。

また、態度値に変化をもたらした理由として特徴的なものは、教師は単に普通の知的職業と同じではなくて、特別な知識技能と愛情を必要とする職業であり、単に生活の資を得るための手段としてだけ考えることのできない特別な職業なのだとうい考え方が、これらの映画によって形成されているということである。このことは、項目 9・10・11・12 の選択率の変化から考察される。しかも、その傾向は、A・B 両組とも同じである。

このことから、cognitive film でも affective film の場合でも、教師という職業のもつ愛とか奉仕とか犠牲などのイメージを変化させるという面から態度に変化をもたらしたとも考えられる。そういう意味では、仮説 II とは反対に、情緒的側面への影響が態度変容の大きい要素として考えられる。

b) このことは、表4によって示されてある各調査の選択率の順位の変化からもうかがわれる。しかも、映画による態度変化の度合の大きかったA組に、この傾向がはっきりあらわれている。

すなわち、前調査で高い選択率を示している項目は、「職業といっても特別な職業ではない」「生活の資を得るための手段である」などであるが、映画を見たあとでは、「愛と奉仕を具体的に実現するものである」という項目が第1位になっている。

しかし、このような項目別選択率にみられる順位も、2ヶ月後調査では、A・B 両組とも、前調査とほぼ同じ型にもどっているのである。

3) 映画の中のどのようなシーケンスが態度変容に関係するかを調べるために行った調査結果から、選択率の高い順に5項目をあげてみると、次のようになる。ただし、B組の場合は、第5位が同率で2項目あったので、6項目をとりあげた。

「自分の考えを変えるのに関係したと思われるシーケンス」(選択率上位5項目)

A組 (cognitive film group)

- |   |       |
|---|-------|
| 1:「学校を修理する費用や本代をためるために、子どもたちといっしょに、まき運びをする先生のようす」 | 78.8% |
| 2:「消極的な子どもたちに対する指導のようす」                           | 74.5% |
| 3:「グループを作って、図工の指導をしているようす」                        | 48.9% |
| 4:「子どもたちにつめを切ってやりながら語りかける先生のようす」                  | 46.8% |
| 5:「家庭訪問をして歩く先生のようす」                               | 38.3% |

B組 (affective film group)

- |   |       |
|---|-------|
| 1:「家庭訪問をして通学をすすめて歩く女先生のようす」                 | 53.7% |
| 2:「学用品や遊び道具を買うために、リックを背負って町まで買出しに行く男先生のようす」 | 48.1% |
| 3:「子どもらとの炭運びから社会科の勉強を指導していく女先生のようす」         | 42.6% |
| 4:「盲腸になった子どもをはげましながら町の病院までついていく女先生のようす」     | 35.2% |
| 5:「病気になる先生に、魚や食物をとどける子どもたちと部落の人たちのようす」      | 31.5% |
| 6:「転任の話聞いて『先生行かないで』と子どもらが女先生に泣きつくようす」       | 31.5% |

これらの項目と選択率をみて言えることは、ドラマチックな構成をとって情緒的に訴えるようなシーケンス(A組の4、B組の4・5・6)よりも、へき地教師の苦労や学習指導のようすなど、いわば教師という職業の内容を説明風に紹介しているシーケンスに多く反応しているということである。つまり、A組の1・2・3・5、B組の1・2・3の項目は、観衆の感情に訴えていくという構成よりは、子どもとの生活や学習指導のようす、あるいは、子どもの実態の紹介など、むしろ、淡々とした説明風の描きかたで教職を表現している部分である。

A・B 両組とも、このように、教師の仕事や生活の理解を目的とするようなシーケンスに多く反応しているということは、仮説 II の「認知的なものに訴えるシーケンスが態度変容に影響する」という傾向を示しているものと言える。しかし、このことから、仮説 II が検証されたと言いきることはできない。すなわち、A・B 両組の比較も厳密にはできなかったし、それぞれの映画について、情緒的項目と認知的項目を等しく設定することもできなかったため、統計的に比較して仮説を厳密に検証することができなかったためである。態度測定尺度の各項目別選択率の変化という点からは、前述したように、むしろ情緒的側面への影響が強くあらわれていることから考えても、今回の調査では、仮説 II が成立するとは言いがたい。

この問題については、今後、プログラム・アナライザーなど、他の研究方法をとり入れて分析されなければならない。

## 文 献

- (1) Dale, E.: Audio-Visual Method in Teaching, New York, Dryden, 1954.
- (2) Miller, N.E. et al.: Graphic Communication and the Crisis in Education, AV Communication Review, 5-3, 1957.

- (3) Hovland, C.I. et al.: Communication and Persuasion, Yale University Press, 1953. (辻正三・今井省吾訳, 誠信書房)
- (4) Maletzke, G.: Psychologie der Massen Kommunikation, Hamburg, Hans Bredow-Institut, 1963. (NHK放送学研究室訳, 日本放送出版協会)
- (5) Kishler, J.P.: The Effect of Prestige and Identification Factors on Attitude Restructuring and Learning from Sound Films, Pennsylvania State College, SDC 269-7-10, 1950.
- (6) Thurstone, L.L. et al.: The Measurement of Change in Social Attitude, 1931.  
Thurstone, L.L. et al.: Influence of Motion Pictures on Children's Attitudes, 1931.  
from "The Measurement of Values", Chicago, The University of Chicago Press, 1959.
- (7) 大内茂男: 映画教育の理論と研究, 「視聴覚教育 50 講」より, 日本放送教育協会, 1965.
- (8) 石川桂司: へき地の視聴覚教育, 日本映画教育協会, 1964.
- (9) Merrill, I.R.: Attitude Film and Attitude Change, AV Communication Review, 10-1, 1962.
- (10) Rosenberg, M.J.: Cognitive Structure and Attitudinal Affect, Journal of Abnormal and Social Psychology, 53-3, 1956.
- (11) 高田一男: 社会心理学の基底—態度の心理学—, 大日本図書, 1963.
- (12) Carlson, E.R.: Attitude Change through Modification of Attitude Structure, Journal of Abnormal and Social Psychology, 52-2, 1956.
- (13) 岸田元美: 教職に対する態度の測定, 徳島大学紀要人文科学第2号, 1952.
- (14) Ball, J. & Byrnes, F.C.: Research, Principle, and Practices in Visual Communication, Michigan State University, 1960. (宇野善康訳, 正栄社)

## 資料

## 教職に関する調査 (No.1)

これは、みなさんの教職についての考え方を知るための調査で、とくに成績に関係したり、あるいは、これによって将来の方向の決定に影響を与えるものではありません。

あくまでも、現在の、あなた自身の考えを書いてください。

氏名

下に教職についての意見が20項目書いてあります。このうちから、あなたが日頃教職に対して抱いている考え方に、はば、一致する項目を5項目えらんでその番号に○をつけてください。

- 1 教職は愛と奉仕を具体的に実現するものである。
- 2 教職に従事すると若さが失われる。
- 3 教職も生活の資を得る為の手段である。
- 4 教職は要するに子守にすぎない。
- 5 教職といっても特別な職業ではない。
- 6 教職は筋肉労働より少しましな位のものである。
- 7 教職は次の社会を位置づける。
- 8 教職は明朗で愉快なものである。
- 9 教職は少しの専門的知識を要する。
- 10 教職は崇高な天職である。
- 11 教職は其れに従事する人を常に若々しくする。
- 12 教職は子供や父兄にへつらうものである。
- 13 教職は能無しがするものである。
- 14 教職はちぢ臭い職業である。
- 15 教職に従事すると世間知らずになる。
- 16 教職は他の知的職業と同じ種類のものである。
- 17 教職は高尚な知性人がするものである。
- 18 教職は社会の隅に忘れられ勝ちなものである。
- 19 教職は精神的満足感を与える。
- 20 教職は尊厳な公職である。

整理番号